

関西大学応援団吹奏楽部

クリスマス コンサート

～集まれ吹奏楽の世界へ!いつでもどこでもだれでも楽しめる～

2020年12月6日(日)

ザ・シンフォニーホール

The Symphony Hall

第59回 定期演奏会

～今宵、シンフォニック・ジャズの歴史を共に旅しましょう～



後援:吹田市 吹田市教育委員会 関西吹奏楽連盟 大阪府吹奏楽連盟

関西大学応援団OB・OG千成会 関西大学応援団吹奏楽部OB・OG紫吹会



アーカイブ配信のご案内



クリスマスコンサート、第59回定期演奏会のアーカイブ配信のチケットは左のQRコードよりお買い求めいただけます。
なお、本日12月6日より12月13日までの1週間、ご視聴が可能です。



Webアンケートの回答にご協力ください

詳細は回答ページにてご確認ください。

【クリスマスコンサート】

吹奏楽による「ドラゴンクエストI」より 序曲 (約4分) 学生指揮
(すぎやま こういち／編:真島 俊夫) 長久 愛

スーパーマリオブラザーズ (約5分) 学生指揮
(近藤 浩治／編:星出 尚志) 糟谷 朗宏

FFメインテーマ (約3分)
(植松 伸夫／編:石毛 里佳)

HYPERNIKON (約4分)
(J.ヴァンデルロースト)

吹奏楽のための第二組曲 (約11分) 学生指揮
(G.ホルスト／編:F.フェネル) 近藤 沙映

グレンミラー名曲オープニング (約7分) 指揮
(A.G.ミラー／編:岩井 直溥) 伊勢 敏之

そりすべり／Sleigh Ride (約3分)
(L.アンダーソン)

トランペット吹きの子守歌 (約3分)
(L.アンダーソン／編:P.J.ラング)

The Typewriter (約2分)
(L.アンダーソン／編:F.E.ワーレ)

A Christmas Festival (約6分)
(L.アンダーソン)

❄️ 部長あいさつ



関西大学応援団吹奏楽部 部長 松田 康士郎

本日は関西大学応援団吹奏楽部 クリスマスコンサート／第59回定期演奏会をお聴きくださり誠にありがとうございます。今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、予定されていた多くの本番が中止となりました。それでも、私たちは歩みを止めることなく、今できることは何なのかを部員全員で考え前を向き続けてきました。その結果、今回の演奏会では当部史上初の「1日2公演」「ストーリーミング配信」という大きなチャレンジを実現することができました。演奏会の開催にご協力くださったすべての皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

関西大学応援団吹奏楽部という素敵な部活で、この年に、たくさんのメンバーに支えられながら部長を務めることができたことを本当に幸せに感じています。今まで支えてくださった皆様、本日私たちの演奏を聴いてくださる皆様に私たちの感謝の想いを音楽で届けます。最後までどうぞお楽しみください。

【第59回定期演奏会】

関西大学学歌 (約2分) 学生指揮
(山田 耕笹／編:市岡 史郎／補筆:酒井 格) 横山 豪

HYPERNIKON (約4分)
(J.ヴァンデルロースト)

吹奏楽のための第二組曲 (約11分) 学生指揮
(G.ホルスト／編:F.フェネル) 近藤 沙映

Catch That Sly Rabbit (約5分) 指揮
(挾間 美帆) 伊勢 敏之

ミラージュⅢ (約19分)
(真島 俊夫)

**「ウエスト・サイド・ストーリー」より
シンフォニック・ダンス** (約22分)
(L.バーンスタイン／編:P.ラヴェンダー)

❄️ 音楽監督



伊勢 敏之

1993年、大阪芸術大学芸術学部演奏学科卒業。

1994年～2000年、ブリーズ・プラスバンドに在籍、ヨーロッパ公演やCD録音等に参加。

1997年～2016年、四條畷学園高等学校吹奏楽部音楽監督を務める。

現在、当部音楽監督のほか、大阪音楽大学特任准教授(吹奏楽・トロンボーン専門合奏)、創価学会関西吹奏楽団指揮者、大阪成蹊女子高等学校吹奏楽部コーチを中心に、吹奏楽トレーナー、指揮者として活動。創価学会関西吹奏楽団に於いては13回の全日本吹奏楽コンクールに出場し、2018年には5年連続11回目の金賞を受賞。

これまでに、国内はもとより、W.パウアー(Tp.)、F.メローニ(Cl.)、R.マーティン(Tu.)、B.ベイカー(Tb.)、ブラックダイクバンドのチームガール、I.バウスフィールド&玉木優(Tb.duo)といった海外の管楽器ソリストと、協奏曲等を共演。

またトロンボーン奏者としても、テレマン室内管弦楽団など、関西のオーケストラ、室内楽のエキストラとして演奏活動。

ウインド・カンパニー、バイエルン・カペレ大阪の各メンバー。関西トロンボーン協会理事。日本吹奏楽指導者協会(JBA)、21世紀の吹奏楽“響宴”の各会員。

トロンボーンを磯貝富治男、呉信一、伊藤清、室内楽を森下治郎、指揮を岩村力の各氏に師事。

— ゲーム音楽の世界 —

吹奏楽による「ドラゴンクエストI」より 序曲

演奏会の最初を飾るのは、国民的RPGゲーム、ドラゴンクエストIより「序曲」です。

発売当時のゲーム音楽はゲーム機本体の性能などから音数、音質ともに厳しい制約がありました。しかし音楽そのものとしては本格的なものを志向して、作曲にすぎやまこういち氏が起用されました。その後、作品は自身により編曲され、オーケストラ作品として演奏されています。今回演奏するのは、吹奏楽作編曲の第一人者である真島俊夫氏によって、その壮大な世界観はそのままだに、素晴らしい吹奏楽曲へとさらに編曲されたものです。

演奏を通して私たちと音楽の世界を冒険しましょう。

888888

♡:88

TIME
294



スーパーマリオブラザーズ

1980年代に任天堂からファミコン(ファミリーコンピュータ)が発売され、その後間もなく、ギネスにも載るほど爆発的に売れたゲームソフトが「スーパーマリオブラザーズ」です。30年以上に渡りテレビゲームという娯楽の最前線を走り続けている作品であり、そこに流れる音楽も多くの人に愛されています。誰もが1度は耳にした事がある曲ですが、発売当時のファミコンではたったの3音だけで曲が作られていました。音の数に制限があったにもかかわらず、「地上」や「水中」、「地下」、「城」のそれぞれのシーンで使われている曲が全く違った印象を与えている事に、作曲者の近藤浩治さんの凄さを感じます。皆様お馴染みの曲やゲームの世界観が吹奏楽ではどのように表現されているか、注目してお聴きください!

FFメインテーマ

ファイナルファンタジーは1987年からスクウェア・エニックスによって開発・販売されているRPGゲームで、魔法や召喚獣の登場する幻想世界が描かれています。

作曲者の植松伸夫氏は「ファイナルファンタジーVII」のテーマ曲である「Eyes on me」で1999年度第14回日本ゴールドディスク大賞における「ソング・オブ・ザ・イヤー」を受賞しています。また、2015年からシエナ・ウインド・オーケストラとともにFFの音楽を吹奏楽で演奏する全国ツアーなどを開催し、好評を博しています。

今回演奏する「FFメインテーマ」は、そのツアーをきっかけとして、吹奏楽に編曲されました。温かい木管アンサンブルと厳かな金管アンサンブルが交互に受け渡され、次第に両者が響き合い、勇壮なテーマが朗々と奏でられます。

HYPERNIKON

この曲は、マサチューセッツ州ウェルハムにあるゴードン大学の音楽学部長であるデビッド・ロックス氏の引退を記念して作られました。「HYPERNIKON」というギリシャ語の曲名は、同大学の標語「More Than Conquerors」に由来し、「征服者以上」と訳されます。

デビッド・ロックス自身の名前にちなんだDメジャーの重厚な金管のファンファーレに始まり、中間部ではテンポが加速し、高揚感が生まれます。トロンボーンとユーフォニアムによって奏でられる美しいトリオメロディ、低音域で導入されるフーガをブリッジに、チャイムとともに再びトリオメロディが展開していきます。そして、オープニングのテーマが壮大なトゥッティで用いられ、華々しく終わります。

「アルセナール」「モンタニヤールの詩」などの数々の名曲を生み出し続ける吹奏楽の巨匠ヤン・ヴァンデルローストのコンサートマーチをお楽しみください。

吹奏楽のための第二組曲

組曲「惑星」で有名なイギリスの作曲家グスターヴ・ホルストによって作曲された吹奏楽曲で、彼が手掛けた中でも初期の作品にあたります。著名な吹奏楽指導者であるフレデリック・フェネルが「この作品における楽器法は、バンド編成を念頭に考え抜かれている」「もしこのスコアを真に理解したならば、それは音楽と指揮というものを理解したのと同じだ」と述べていることから、この作品は吹奏楽の分野における古典的な演奏会用作品としてきわめて重要な位置を占めた1曲と言えるでしょう。

4楽章構成のこの曲は1曲を通して様々なイギリス民謡や舞曲が用いられており、各章にはタイトルが付けられています。

第1楽章 マーチ

2つの短いフレーズの後、幸せな響きで「グローリシャーズ」と呼ばれるイギリスの民族舞踏モリスダンスが始まり、その後美しいユーフォニアムの旋律が特徴的な「スワンシー・タウン」と呼ばれる水夫の歌、「クローディ・バンクス」が奏でられます。

第2楽章 無言歌「私の恋人を愛す」

結婚に反対する両親によって海に送られた若い少女が歌う歌「私の恋人を愛す」の哀愁漂う旋律が使われています。

第3楽章 鍛冶屋の歌

汗にまみれ、火花を防ぐための革のエプロンをかけ、厚ぼったい布をまとった、たくましい男のはつらつとした姿を思い起こさせるタイトルです。

第4楽章 ダーガソンによる幻想曲

「ダーガソン」と呼ばれる8小節の循環主題が冒頭から終結まで奏され、後半には「グリーンスリーブス」が対旋律に現れます。



グレンミラー名曲オープニング

吹奏楽で用いられる様々な楽器を、グレンミラー楽団の名曲に乗せて紹介していきます。まずは懐かしい旋律の「茶色の小瓶」から始まり、おしゃれなダンス・ナンバー「タキシード・ジャンクション」、アメリカ民謡が散りばめられた行進曲「アメリカン・パトロール」へと続きます。プロポーズの電話をかける「ペンシルベニア6-5000」、恋人への初めての贈り物「真珠の首飾り」へと色を変え、軽快なメロディーが特徴の「イン・ザ・ムード」、さかのぼる船の綱を引いた人たちの労働歌「ヴォルガの舟歌」と進んでいきます。その後は、勇壮なマーチ「セントルイス・ブルース・マーチ」、汽笛から始まる楽しい汽車の旅「チャタヌーガ・チュー・チュー」へと移ります。最後はデンバーの月明かりをイメージに描いた「ムーンライト・セレナーデ」で幕を閉じます。

— アンダーソンでクリスマス —

そりすべり / Sleigh Ride

そりすべりは、1948年にアメリカ合衆国の作曲家ルロイ・アンダーソンが作曲した管弦楽曲です。クリスマスの時期になると必ず耳にする定番曲ですが特にそれを意識したわけでは無く、冬の風景を思い浮かべて作られました。そりすべりという雪遊びの一環の1人乗りのものを思い浮かべますが、この曲は雪道の中、馬の後ろにそりを付け人や荷物を運搬する馬そりを描いています。その馬そりを表現するために、馬が駆け抜ける際の蹄の音を表したウッドブロックや馬を叩くムチの音、馬のいななきを表現するトランペット、鈴の音を表現したスレイベルが使用されています。一度は耳にされたことがある親しみやすいメロディに加えて、巧みな楽器法により描写した、冬の情景をお楽しみください。

トランペット吹きの子守歌



揺り籠を思わせるような伴奏に乗ってトランペットが優しくゆったりとした子守歌を奏でるこの曲は、「トランペット吹きの休日」と並んでルロイ・アンダーソンの代表作として広く親しまれています。スコットランドの民謡などに見られるヨナ抜き音階に似た民謡音階が一部使用されているのが特徴です。

トランペットというと、ファンファーレなどで活躍する、華やかで輝かしい音色を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。子守歌のような静かで和やかな曲を一番不得手とするトランペットにあえて子守歌を吹かせるという、彼のユーモアがあふれる一曲をお楽しみください。

ルロイ・アンダーソン

作・編曲家。1908年米国マサチューセッツ州生まれで、ハーヴァード大学でスカンジナビア語と独語を専攻するかたわら、作曲をエネスコとヴォルター・ピストンに師事。卒業後は、アーサー・フィードラー率いるボストン・ポップスの専属作曲家兼編曲家となって活躍しました。ピアノ協奏曲やミュージカルなど大作もありますが、圧倒的に有名なのは描写的な管弦楽小品です。本日演奏する「そりすべり」「The Typewriter」の他に「シンコペイテッド・クロック」などのヒット曲が多数あります。



The Typewriter

タイプライター (The Typewriter) は、ルロイ・アンダーソンが1950年に作曲した管弦楽曲です。初演はボストン・ポップス・オーケストラが行いました。

彼の最も有名な作品のひとつで、タイプライターが楽器として、キーをタイプする音やベルの音、レバーを操作する音などを上手く曲の中に取り込んでいます。

当時の中流階級を象徴する代表的な仕事で、大きなビルのオフィスで毎日せっせとタイプライターを打つことでした。そんな時代背景の中で軽快なリズムとメロディに乗せて実物のタイプライターが楽器として使われており、仕事に追われ、忙しいオフィスの情景がユーモラスに描写されています。

A Christmas Festival

1950年にアンダーソンによって編纂されたこの曲は、計8曲ものクリスマスソングのメドレーとして構成されています。元々はオーケストラ向けに書かれた曲であり、今日までクリスマスの定番コンサートナンバーとして広く親しまれてきました。

冒頭に演奏される「もろびとこぞりて」をはじめ、きらびやかにエンディングを飾る「ジングルベル」、「神の御子は今宵しも」など、クリスマスの時期には誰もが耳にしたことのある曲たちが童心をくすぐるような華やかなテイストでまとめられており、まさにアンダーソンのオーケストレーションの技が輝く作品だと言えるでしょう。

クリスマスコンサートを締めくくるに相応しい一曲に、メンバー一同、今日この日を無事に迎えられた喜び、そして感謝を乗せて演奏いたします。



— シンフォニック・ジャズの歴史の旅 —

Catch That Sly Rabbit (in 2020)

この曲は私たちが第6回大会から出場しているシンフォニックジャズ&ポップスコンテストで課題曲として委嘱された作品です。

作曲者である挾間美帆氏は2016年に米ダウンビート誌の「未来を担う25人のジャズアーティスト」にアジア人でただ一人選出、また2019年4月にニューズウィーク日本版「世界が尊敬する日本人100」にイチローや羽生結弦などと並んで掲載、更に同年11月アルバム「ダンサー・イン・ノーホエア」が米グラミー賞の最優秀ラージ・ジャズ・アンサンブル・アルバム部門にノミネートされるなど、世界が注目する日本人女性音楽家です。

Catch That Sly Rabbit は日本語に訳すると「あのずる賢いウサギを捕まえろ！」という意味になります。挾間氏はこの作品について次のように解説されています。

「ずる賢い私たちの目を欺きながら茶目っ気たっぷりに笑う、架空のウサギのキャラクターを想像して作曲しました。素早い展開で色々な音楽スタイルが変わったり、落ち着いた調性そのまま音楽が展開していきます。様々な表情を見せる曲を通して、聞いてくださる皆さんそれぞれに独創的なキャラクターを想像していただけたら嬉しいです。」

ミラージュⅢ (in 2003)

この作品は、2003年の第6回響宴のための委嘱作品です。

「響宴」とは、21世紀の吹奏楽実行委員会が優れた吹奏楽作品を世に出すために毎年行っている活動です。

またこの作品は、ジャズ・イディオムをシンフォニックな響きで表現するという試みである、「ミラージュ」シリーズの一つです。シリーズは全部で5作品あり、「ミラージュⅤ」は作者の遺作となりました。

『ミラージュⅢ』は、吹奏楽と6人のジャズ・プレイヤー(Tp. A.Sax. Tb. Gt. Bs. Drs.)が共演する形態で書かれ、ジャズビートとアフロキューバンが交差する1楽章から、2楽章では大人な雰囲気のあるブルース、そして3楽章では様々な楽器が緻密なリズムセクションを繰り広げます。

各楽章には以下の曲題が添えられています。

第1楽章 Tune up

「楽器を調律する」といった意味があり、腕鳴らしといったところでしょうか。

第2楽章 Something blue

少し哀愁を帯びたサウンドに身を委ねてみてください。

第3楽章 After hours

「ライブが終わった後の時間」という意味で、ジャム・セッションが繰り広げられるのが常となっています。

「ウエスト・サイド・ストーリー」より シンフォニック・ダンス (in 1960)

1950年代当時のニューヨークの社会的背景を織り込み、移民が集まり治安が悪かった“ウエストサイド”で起こった、ポーランド系アメリカ人の「ジェット団」とプエルトリコ系アメリカ人の「シャーク団」の2つの少年非行グループの抗争を舞台に、その犠牲となる若い男女、(トニーとマリア)のたった2日間の純粋な恋と死を描いた物語です。敵対するグループ同士の間で芽生える悲劇の恋の物語で、現代版「ロミオとジュリエット」とも言われています。「『ウエスト・サイド・ストーリー』よりシンフォニック・ダンス」はこのウエスト・サイド・ストーリーに使用された曲の中からダンスナンバーを中心に演奏会用音楽にしたものです。

【Prologue】—プロローグ—

ミュージカルや映画の導入部とほぼ同じ音楽から始まります。最初の全員での「ソドー#ファ」の増四度音程は不安を感じる「悪魔の音程」と言われていて、対立しているジェット団とシャーク団を表しています。突如現れる笛の音は、この喧嘩を止める警官の笛です。

【Somewhere】—どこかに—

ジェット団とシャーク団の決闘の末、殺人犯となってしまったトニーと彼を愛するマリアが、“どこかへ行って幸せに暮らせた方がいいがそれを実現することは難しい”という悲痛な状況が歌われます。

【Scherzo】—スケルツォ—

トニーとマリアが、決して叶うことのないジェット団とシャーク団を含む皆が仲良く踊る夢を見るダンスシーンの音楽です。

【Mambo】—マンボ—

ジェット団とシャーク団が体育館でダンスを踊るシーンの音楽です。曲中に「マンボ!」と叫ぶ部分は“心の中で”一緒に叫んでいただければと思います。

【Cha-Cha】—チャチャ—

ダンスパーティ会場で偶然出会ってお互い一目惚れしたトニーとマリアが踊る場面です。ラテンでは珍しい可憐なリズムです。

【Meeting Scene】—出会いの場面—

トニーとマリアが言葉を交わすシーンの音楽です。美しいフルートソロから始まる、木管のアンサンブルに耳を傾けてください。

【Cool】—クール— ~ 【Fugue】—フーガー—

映画では、両団の団長が殺された決闘での興奮を表現し、ガレージの中で狂ったように踊るシーンの音楽です。静かな部分から激しい部分、そしてまた静かな部分、というところから彼らの心情が伝わるのではないのでしょうか。

【Rumble】—決闘—

ジェット団とシャーク団が対決し、シャーク団団長のベルナルドによりジェット団団長のリフが刺殺され、決闘の仲裁の為に来たトニーがベルナルドを刺殺してしまう悲劇的な場面を表す、激しく迫力のある音楽です。

【Finale】—フィナーレ—

ベルナルドを殺したトニーがマリアの目の前で撃たれ、トニーとマリアが最後の会話を交わし、マリアをはじめ出演者全員がトニーの葬送を見送る荘厳な場面に使われた音楽です。途中からSomewhere —どこかへ— のメロディも聴こえてきて切なく、またどこかに力強さを感じるのではないのでしょうか。

音楽で、皆様をウエスト・サイド・ストーリーの世界へお連れします。次々と変わっていくシーンとそれを彩るバーンスタインの名曲をお聴きください。